

better off 構文の定着過程に関する認知言語学的考察

大谷直輝
東京外国語大学
otani@tufs.ac.jp

概要

本稿では、人手でタグ付けした英語の歴史コーパス (COHA) の調査に基づき、I'd be better off {dead/left alone/going home} 「{死んだ/一人取り残された/家に帰った} ほうが良かったです」のような、形式面でも意味面でも不規則性が見られる **better off 構文** がどのような過程を経て英語に定着したかを検証するための仮説を提示する。特に、コーパスのデータを **認知言語学** の観点から解釈することで、well off (裕福な) の比較級であった、better off に、①意味の一般化、②仮想状況の前景化、③付加句の補語化という3つの変化が起こった結果、better off 構文が誕生したと主張する。本研究が提示する仮説は、言語使用から生じる知識のありようを実証的に考察する学際的な研究において、自然言語処理の観点から検証される。

1 はじめに

現代英語には、(1)のように、形容詞 better off の叙述用法に **非時間的關係** (atemporal relation) [1] を表す様々な要素が後続し、全体が「～したほうが良かったです」という意味を表す用法が広範に観察される。

- (1) (a) She is better off {with/without} me.
(b) I'd be better off at home with all those kids!
(c) Maybe I'd be better off in jail.
(d) He is better off {buying it/learning it}.
(e) I'd be better off {left alone/gone from here}.
(f) I'd be better off {dead/alone}.

(1)では、better off の後に、関係を表す様々な要素 (前置詞句、現在分詞、過去分詞、形容詞、等) が出現し、主語が望む **仮想的な状態** を表す。この用法には、(1d)(1e)(1f)のように、better off に分詞句や形容詞のような不規則的な要素が後続するものも含まれる。本稿では、歴史的なデータ (Corpus of Historical American English: COHA) [2] に対して認知言語学の観点から考察することで、better off に補語句が後続する用法 (以下、better off 構文) がどのように出現・定着したかの過程を示す仮説を提示する。

2 better off 構文の特徴

構文文法では、「形式と意味の対からなる構造」である **構文 (Constructions)** の体系的なネットワークが人間の言語知識の中枢を占めると考える [3, 4]。構文は伝統的には形式や意味に不規則性が見られる構造と定義されてきたが、近年、十分な頻度で使用される形式と意味の対も構文として記憶されると主張されている [5]。ある構造を構文と認定するための具体的な基準として以下の四点が示されている [6]。

- (2) (a) 形式面に不規則性が見られる。
(b) 意味面に不規則性が見られる。
(c) 表現に独自の制約が見られる。
(d) コロケーションに選好性が見られる。

以下、[7, 8] の文献に基づき、(2)の基準を用いて、better off の本用法を構文とみなせるかを検討する。

2.1 第 1, 2 の基準：形式と意味の不規則性

better off には形式面と意味面で不規則性が見られる。まず、形式的には、形容詞 better off に前置詞句、現在分詞、過去分詞、to 不定詞、形容詞など、補語として解釈される非時間的關係を表す様々な要素 (XP 句と呼ぶ) が後続する。XP 句は従来の品詞論では分類できないカテゴリーを構成する。また、XP 句には、(1d)(1e)(1f)の形容詞や分詞句のように、形容詞には後続しない不規則的な要素が現れるものも見られる。次に、意味的な不規則性については、第一に、XP 句は、(現状よりもましな) 主語の仮想的な状態を表す。第二に、XP 句が表す事態は必ずしも一般的に好ましいわけではないため、語用論的な誇張や皮肉が生じやすい。第三に、better off 構文は「～したほうが良かったです」という非構成的な意味を持ち、全体が非認識モダリティと類似した機能を持つ。

2.2 第 3 の基準：表現独自の制約

語源的に better off は形容詞 well off (裕福な) の比較級であり、他の形容詞と同様に、限定用法 (the better off person) と叙述用法 (The person is better off)

が確認できる。一方、better off 構文は通常、叙述用法のみで用いられ、ごく一部の高頻度で用いられるイディオム的な例外以外は、限定用法で用いられることはない (the ‘better off dead’ man)。

2.3 第4の基準：コロケーションの選好性

better off 構文には共起する要素に選好性が見られる。the British National Corpus (BNC) [9]における better off の叙述用法の全 823 例の調査では、補語句を取る better off 構文が 545 例 (I’d be better off {dead, left alone, buying it, without you} など)、補語句を取らない例が 278 例 (He is better off now. / She is financially better off. など) 見られた [7, 8]。補語句有り と 補語句無し のグループを比較すると、補語句有りのグループは補語句無し のグループとは対照的に、(i) 助動詞 と、(ii) 1/2 人称主語 との共起頻度が高く、better off 構文には選好するパターンがあることが分かった。

表1 1/2 人称主語と better off の叙述用法の共起

	補語あり	補語なし	合計
1/2 人称主語	191	69	260
3 人称主語	354	209	563
合計	545	278	823

表2 助動詞と better off の叙述用法の共起

	補語あり	補語なし	合計
助動詞	208	83	291
助動詞無し	337	195	532
合計	545	278	823

また、1/2 人称主語や助動詞と better off 構文が共起する例を見たところ、提案や勧誘など、発話行為文で使われる傾向がある点を確認された。

(3) (a) You’d be much better off with someone else.

- (b) You may be better off going to the RSPCA.
(c) I am better off without you.

3 Better off 構文の通時的な調査

本節では、COHA を用いて、どのように better off 構文が英語に定着したかを理論的に考察する。19 世紀の better off には(4)のような用法が見られ、現在のよう補語句を取る用法はほとんど見られない。

- (4) (a) He is now better off (than before).
(b) He will be better off financially.

以下に、[10]における COHA の調査に、理論的な考察を加えながら、意味的にも文法的にも特異的な better off 構文が英語に定着した過程を考察する。

3.1 データと方法論

COHA は 1810-2009 年のアメリカ英語約 4 億語からなる通時コーパスである。本研究では、COHA から better off の全例 (2642 例) を抽出し、その中から、手作業で叙述用法の better off を抽出 (2527 例) する。その後、表 3 の変数を各例にコーディングし、変数間の関係を定量的に処理することで、better off が使われる文脈の変化を明らかにする。

表3 better off にコーディングする変数と値

変数	値
文法	(1) better off の文法役割 (叙述用法, 限定用法, 名詞用法) (2)補語句の有無
共起要素	(1) 主語の人称, (2) 助動詞, (3) than, (4) if 節
意味	字義的な意味の保持
ジャンル	(1) Fiction, (2) Popular Magazines, (3) Newspapers, (4) Non-Fiction Books
出現年	1810-2009

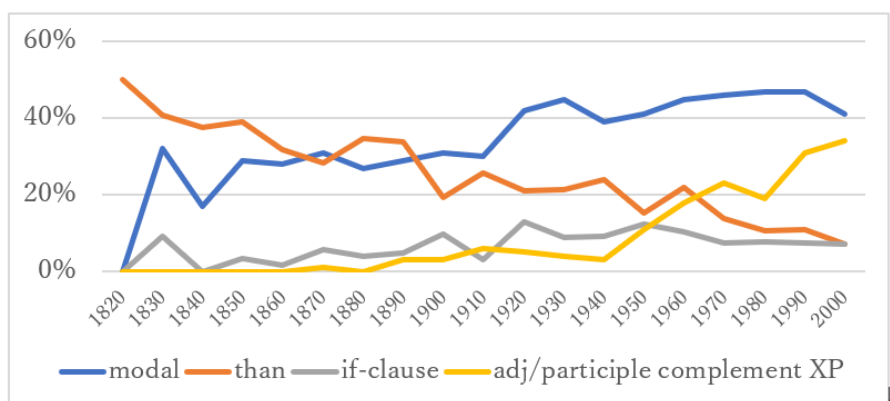


図1 better off に共起する要素の変化

3.2 結果

調査の結果、better off には以下のような変化が観察された。第1に、better off と than との共起頻度は一貫して減少していた。第2に、better off と認識モダリティの助動詞との共起頻度は、1920年以降、増化した。第3に、不規則的な補語句（形容詞と分詞句）が1950年以降、増え始めた。さらに、字義的な意味の割合に注目すると、19世紀の better off は多くが字義的な「裕福」という意味（例 He is financially better off than her）であったが、2000年代に入ると、字義的な意味は17%まで減少していた。

3.3 考察と仮説の提示

最初に、better off の字義的用法と better off 構文の違いをまとめる。形式面では、better off 自体が文の補語として機能する字義的用法とは異なり、better off 構文では、better off に主語の状態を表す補語句が後続する。また、字義的用法の better off は、主語が比較対象より豊かな状態を表すが、better off 構文では、better off ではなく、その補語句が主語の仮想的な状態を指し、「その状態の方がmalıdır」という意味となる。本稿では、better off に後続する要素に再分析 (reanalysis) が起こり、better off 構文が定着するまでの過程を4段階に分けて示す仮説を提示する。

(5) better off 構文が定着するまでの4段階

第一段階：字義的な「裕福な」の意味

↓ 意味の一般化

第二段階：「より良い」という意味

↓ 仮想状況の前景化・比較対象の背景化

第三段階：「一定の条件でより良い」

↓ 仮想状況を表す要素の補語化

第四段階：「～の方がmalıdır」（構文誕生）

本稿では、better off に、(i) 意味の一般化、(ii) 仮想状況（＝セッティング¹⁾）の前景化、(iii) セッティングの補語化、が起こることで、他に類例がない、主語の仮想的な状態を表す補語句を持つ better off 構文が誕生したと考える。

3.3.1 第一段階：字義的な意味

第一段階は、better off が well off の比較級として「より裕福な」という意味を表す段階である。主語は比較対象より、経済的に裕福な状態にある。

(6) (a) I am now better off than before.

(b) John is better off now.

(c) He is financially better off than me.

(6a, b)では、同一人物の二つの状態が、(6c)では二人の人物の状態が比較され、主語が than 句によって明示的に示すことができる比較対象より裕福な状態であることを表す。

3.3.2 第二段階：意味の一般化

第二段階は、字義的な「裕福な」から「より良い」へ、意味の一般化が起こる段階である。

(7) (a) You are better off at home.

(b) Well, I think he couldn't come. I am better off with you. And perhaps I can help, too.

(7)の各例では、二つの状態が比べられ、主語の状態が比較対象に比べて「より良い」ことが示される。ここでは、better off に後続する at home や with you のような前置詞句が、より良い状態となる状況（つまり、セッティング）を表している。例えば、(7a)では「家にいる」、(7b)では「あなたと一緒にいる」という状況において、主語は「より良い」状態となる。

3.3.3 第三段階：仮想状況の前景化

第三段階は、主語が置かれた仮想的な状況（セッティング）が前景化される段階である。better off では二つの状態が比較されるが、一度、「より良い」という用法が定着をすると、現実のみじめな状態と比較をして、仮想世界ではより良い状態であることを示す用法が広く見られるようになる。

(8) (a) I would be better off if I worked harder.

(b) You might be better off without her.

(c) You would be better off at home.

仮想世界における主語の状況が前景化されていることは、better off がモダリティを表す要素（助動詞、法副詞）や if 節との共起が増えたことから示唆される。また、仮想世界が前景化されると同時に、比較対象となる現状が背景化され、better off の比較の意味は薄れていく。このことは、than の出現頻度が継続して減っていることから示唆される。

3.3.4 第四段階：セッティングの補語化

第四段階は、再分析が起こり、文の付加句 (adjunct phrase) として主語がより良い状態となる仮想的なセッティングを表していた要素が、主語の仮想的な

¹⁾ セッティングとは事態が生じる状況と定義される。[11]

状態を表すようになる段階である。この段階では、*better off* と後続する要素 (=付加句) の結びつきが強くなり、[*better off* 補語句]として再分析されることで、*better off* 構文が出現すると考えられる。補助記号を用いると再分析は(9b)と(9c)のように表せる。

(9) (a) I'd be better off without you.

(b) I'd be [*better off*]_{complement} [*without you*]_{adjunct}

(c) I'd be [[*better off* [*without you*]_{complement}]_{complement}]
(9b)は付加句 (*adjunct*) の *without you* を、(9c)は補語句 (*complement*) の *without you* を表記したものである。ただし、*better off* に後続する要素が補語句であるか付加句であるかは排他的なものではなく、付加句の補語句としての再分析は段階的に進むものである。

この再分析を引き起こす要因として考えられるのが、文脈における語用論的な意味の語彙の意味への定着である[12]。つまり、(8b)の *You might be better off without her* を例とすると「彼女がいない状態が(いるよりも) より良い」という意味は、文脈内で「彼女がいない方がまし」な状況を表すことがあるが、同様の文脈で繰り返し用いられることにより、文脈から生じる「～の方がましだ」という語用論の意味は *better off XP* という句が持つ意味に再解釈される。同時に、*better off* と後続する要素の結びつきが強くなり、文法面でも再分析が起こったと考えられる。

この再分析は、*better off* に助動詞との共起が増え、*than* との共起頻度が低くなった 1900 年頃にはすでに進行していたと考えられる。一方、この再分析の定着をコーパス内で明確な形として捉えられるのは、*better off* 後の補語句の中に、不規則的な補語句が増え始める 1950 年頃である。すなわち再分析によって、*better off* に非時間的な要素を表す補語句が後続するようになった結果、標準的な文法では不規則的とみなされる(10)のような、形容詞、分詞句が補語句の位置に現れる用法が増え始めたと考えられる。

(10) I'd be better off {dead, left alone, going home}

3.4 *better off* 構文に関するまとめ

COHA の調査結果に基づいて、*better off* 構文が誕生した経路をまとめると以下ようになる。

(11) 字義的な *better off* に意味の一般化が起こり「より良い」という意味を表す中で、仮想的な状況の前景化と比較対象の背景化が起こり、*better off* に「(仮想的な状況で) より良い」という意味を表す用法が強くなる。次に、*better off* に再分析が起こり、付加句として機能していた仮想

的な状況を表すセッティングが *better off* との結びつきを深め、*better off* の補語として再解釈されることで、*better off* 構文が誕生する。

ただし、*better off* における用法の変化は、*better off* 全体ではなく、一部のみに起こるため、現代英語の *better off* には字義的な意味から *better off* 構文まで、意味の多層化 (*layering*) が見られる。[13]

4. 学際的な研究に向けて

本稿で提示した仮説は、COHA のデータに基づく一方で、一般的な言語変化に見られる傾向を重視して考案したものである。今後、仮説の妥当性については実証的な検証が必要である。以下に 3 点、今後の課題を挙げる。第一に、本稿では、認知的な自然さから、意味の一般化の後に、仮想世界の前景化が起こったと仮定した。ただ、COHA には 1810 年以降のデータしか含まれておらず、また、1800 年代はデータ数が少ないため、仮想世界の前景化と意味の一般化が起こった順序が異なる可能性も含め、さらに検証が必要である。また、一般的に文法化は複数の要素が相互に関連しあいながら同時に進行するものであるため、各変化の相互作用に関する考察も必要である。第二に、1900 年以前に現れる少数の不規則的な補語に関する説明が必要である。特に、**言語使用域 (register)** ごとで、*better off* 構文の定着度の程度が異なる可能性や、高頻度の語彙化した要素 (*she would be better off dead than alive* の *dead than alive* など) が与える影響について検討する必要がある。第三に、表 1 を見ると、1920 年頃から法助動詞が増えているように見えるが、この増加に質的な差異があるかどうかについて、さらに検証が必要である。

最後に、本稿で提示された仮説を実証的に検証する際の方法の 1 つとして、自然言語処理の技術の応用が考えられる。自然言語処理では、発話された言語データに基づいて、人間が持つ言語知識のありようを探るが、これは、「言語使用の中から繰り返し用いられるパターンが記憶され、類似性に基づいて抽象化されることで、語彙と文法を含めた言語知識が創発する」と考える**用法基盤モデル**[14, 15]と理念を共有する。そのため、発話された言語データから表層レベルの類似性に基づいて教師なしで一般化されたクラスターは、人間が持つ言語知識の近似値として、本稿の仮説を実証するための**収束証拠**の 1 つとなる可能性がある。そのため、本稿の仮説は、[16]で自然言語処理の観点から検証を進めていく。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 19K00657 の助成を受けたものである。また永田亮氏（甲南大学）には、原稿全体にわたり詳細なコメントをいただいた。

参考文献

- [1] Ronald W. Langacker. **Foundations of Cognitive Grammar I: Theoretical Prerequisites**. Stanford University Press. 1987
- [2] Mark Davies. Expanding horizons in historical linguistics with the 400-million word corpus of historical American English. *Corpora*, Vol. 7, No. 2, pp. 121–157, 2012.
- [3] Charles J. Fillmore, Paul Kay, and Mary C. O'Connor. Regularity and Idiomaticity in grammatical constructions: The case of *let alone*. *Language* 64: pp. 501—538, 1988.
- [4] Adele Goldberg. **Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure**. University of Chicago Press. 1995.
- [5] Adele Goldberg. **Constructions at Work -The Nature of Generalization in Language**. Oxford University Press. 2006.
- [6] Martin Hilpert. **Construction Grammar and Its Application to English**. Edinburgh University Press, Edinburgh, 2014/2019
- [7] 大谷直輝. 英語の *better off* 構文について. 日本言語学会第 157 回大会予稿集, pp. 246-251, 2018.
- [8] Naoki Otani. A constructional analysis of the ‘better off construction’ in English. The 15th International Cognitive Linguistics Conference. 2019.
- [9] BNC Online: *The British National Corpus Online* (BNC World Edition). Shogakukan Corpus Network. URL: <http://scnweb.jkn21.com/BNC2/>
- [10] Naoki Otani. The rise of modal meaning: The case of *better off*. The 11th International Conference on Construction Grammar. 2021.
- [11] Ronald W. Langacker. **Cognitive Grammar: A Basic Introduction**. Oxford University Press. 2008.
- [12] Paul J. Hopper and Elizabeth C. Traugott. **Grammaticalization**, 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press. 2003.
- [13] Paul J. Hopper. On some principles of grammaticization. **Approaches to Grammaticalization**, pp. 17-35. John Benjamins. 1991.
- [14] Ronald W. Langacker. A usage-based model. **Topics in Cognitive Linguistics**, pp. 127-161. John Benjamins. 1988.
- [15] Michael Barlow and Suzanne Kemmer. **Usage-Based Models of Language**. CSLI Publications. 2000.
- [16] 永田亮・大谷直輝・高村大也・川崎義史. 言語処理的アプローチによる *better off* 構文の定着過程の説明. 言語処理学会第 28 回年次大会発表論文集.